天満宮

題字／後西天皇御宸筆

季刊
春　号
平成29年4月
Vol.14

特集

◆「史跡御土居の青もみじ」公開／非公開文化財特別展
◆北野神輿の比類なき歴史（二）　京都文化博物館学芸員　西山　剛
◆天神さまと私「北野はお茶やお菓子を楽しむ機会を与えてくれる北野大茶湯ゆかりの地」
京菓子司　末富　山口　富蔵

北野天満宮社報 春号 Vol.14
KITANO TENMANGU NEWS

北野天満宮の由来

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国の天満宮・天神社の宗祀（総本社）の神社です。

天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天暦元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の乾の地にあたる北野に御鎮座致しました。天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満天神」の神号を賜り、さらに朝廷・皇室の崇敬を受け二十二社に加えられ、臣下として初めて官幣中社に列格され国家鎮護・皇城鎮護の神として崇められました。今や天満宮・天神社は全国に約一万二千社と広がっています。

寛弘元年（一〇〇四）、一條天皇がはじめて行幸されるに及び、以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、さらに将軍家や有力大名の崇敬を受けてまいりました。文道大祖・風月本主と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されております。そして菅公薨去延喜三年（九〇三）より百年をかけて北野の天神信仰が誕生致しました。

菅公は、千有余年の長い歴史の中で、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民・一般に至るまで「天神さま」と呼ばれ親しまれてきました。菅公が生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生きています。

現在の御社殿は慶長十二年（一六〇七）豊臣秀吉公の遺命を受けた豊臣秀頼公の造営で、八棟造という豪壮な建築様式を誇り国宝に指定されています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神・天神信仰として篤く信仰されています。

京都 平安京の天門

【シンボルマーク】

平安京の乾（北西）に位置する北野の地・天門をイメージし、星欠けの三光門（三辰信仰）から星梅鉢を北極星と捉えた星の軌道と、神社の象徴である一の鳥居を描き、北野天満宮の信仰的特徴を捉えたマーク。

（平安京については裏面参考）

表紙写真　―天神地祇の神々を祀る地主社―

平安京の北西（乾）の方角「天門」にあたるこの地は、天満宮創建以前より全国六十余国の天神地祇の神々が祀られる聖地であった。地主社は当宮で最も古い社であり、第一の摂社である。現在の菅公を祀る御本殿も、この地主社の御前をふさがないよう配慮して建てられたと伝えられている。

御挨拶

菅公を祀る国宝御本殿の東側奥に、平安京の天神地祇六十余国の神々を祀る第一摂社 地主社

菅公ご遺愛の梅が咲き誇り、境内一円が馥郁たる香りに包まれた時季も過ぎ、愈々社務所前の北野桜が咲き誇る春爛漫の候となりました。皆様には御健勝の事とお慶び申し上げます。

延暦十三年（七九四）、桓武天皇により平安京に遷都がなされ、次第に由縁の社寺等も造営され都市として形成される中、内裏・大極殿の北西・天門にあたる北野の地は、神々を祀る最も重要な場所であり、西側に流れる紙屋川（荒見川）は大嘗祭執行に先立ち、御祓が行われる聖地でありました。

その一端を紹介しますと、菅公を祀る国宝御本殿奥に第一摂社である「地主社」が鎮座していますが、このお社は『続日本後記』の承和三年（八三六）の条に、「遣唐使のために、天神地祇を北野に祀る」と記載され、遣唐使発遣のため全国六十余国に祀られている天神地祇をこの地に勧請し祈願したお社であります。また『西宮記』延喜四年（九〇四）の条に「雷公を北野に祀らしむ」、さらに藤原基経卿が元慶年中、「年穀のために雷公を祈り感応あり、毎年秋、之を祭る」とされたお社が、農耕の神であり雷神をお祀りした第二摂社「火之御子社」でございます。つまり、菅公が北野社（北野天満宮）の御祭神として祀られる以前に、すでに北野には「天神」「雷神」が祀られていたのです。

やがて永延元年（九八七）八月、一條天皇の勅命により「北野天満天神」の神号を賜り、寛弘元年（一〇〇四）一條天皇が行幸され、北野祭は官祭となり、国家の崇敬を受ける神社となりました。以来北野天満天神は、貴族・武将ばかりでなく庶民からも崇敬され、長い歴史の節々、様々な諸相を持って継承されてきたのです。

平成十四年、千百年大萬燈祭の折、御本殿の奥深くより十三体の「木造鬼神像」が見つかり、直ちに国の重要文化財に指定されました。この神像群は天慶元年（九三八）あるいは翌年、平安京の大路小路に置き祀ったという岐神・御霊であり、遠くから来る邪気を祓う神でありました。この神像の中に『北野天神縁起絵巻』にある蔵王権現の原型があり、御本殿より御霊信仰を端緒とする天神信仰成立過程の神々が出現したことで、天神信仰のもつ諸相を解明する新史料として、現在検証を進めている所でございます。

「文道大祖 風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で、誠の心を以て学業に勤しまれたことから、学問・書道・芸能・農耕・厄除・至誠の神として崇敬されて参りました。今後さらに歴史調査を進め、天神信仰の発揚と古儀の再興に努め、より一層の文化発信を続けて参る所存でございます。

今後とも皆様のご理解ご協力をお願い致しますとともに、氏子崇敬者方々のご健勝をご祈念申し上げます。

北野天満宮
宮司 橘 重十九

京都 平安京の天門

平安京の北西（乾の方角）「天門」に鎮座する北野天満宮
豊臣秀吉公の歴史的遺構「史跡御土居の青もみじ」を公開

御祭神菅原道真公（菅公）をお祀りする全国天満宮・天神社約一万二千社の総本社 北野天満宮。天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇の天暦元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の乾「天門」（※注）にあたる北野の地に創建された。

境内は約四百年前の天正十五年（一五八七）に豊臣秀吉公をはじめ千利休居士らが亭主を務め催された空前絶後の大茶会「北野大茶湯」の舞台であり、日本文化の発信地として親しまれている。

境内西側に広がる「史跡御土居」は、天正十九年（一五九一）、豊臣秀吉公が外敵の襲来に備える防塁として、また川の氾濫から市中を守る堤防として、京都の中心をぐるりと取り囲む形で総延長約二十三キロにわたって築かれた土塁である。

しかし江戸時代になると、御土居はその必要性が薄れるとともに少しずつ解体され、今では史跡に指定された北区や上京区の九カ所でしか、その姿を見ることができない。幸い当宮の御土居は当時の様相を色濃く残し、現在では梅や紅葉の名所と知られるまでになっている。

一昨年来、初夏の史跡御土居を「青もみじ苑」として公開しているが、本年も四月十五日から五月三十一日まで開苑し、清々しい新緑の息吹を参拝者の皆様に感じて頂く。

御土居には約三百本の紅葉があり、中には樹齢四百年に及ぶ古木も植わり、秀吉公の遺構が随所に見られる。御土居の中で唯一北野にだけ造られた石造りの暗渠（悪水抜き）は、他にはない歴史的遺構として注目されている。

色鮮やかな若葉が清々しい青もみじ

※注
【天門】
都の中心より北西の位置をいう。気学・風水・易によれば、四正（東西南北）に対し、東の青龍、南の朱雀、西の白虎、北の玄武と呼ばれる各霊獣が守護する場所を四神相応の地と定めている。山城の地に建てられた平安京は、正にこれに叶う適地であった。
一方、四隅は種々の「気」が働く方位であり、北東の丑寅（艮）は鬼門（邪気・厄災の入り込む方位）として忌み嫌われ、鬼門封じのために社寺が建てられた。東南の辰巳（巽）は風門、南西の未申（坤）は人門（裏鬼門）とされる。北西の戌亥（乾）は、天門であり、易でいえば全陽の「気」が働く方位にして神々を祀る地である。
北野は平安時代において御所の乾に位置し、神々を祀る最も重要な場所として古来より祭祀が執行されている。この地に菅公の御神霊が鎮められて、北野社（北野天満宮）が創建されたのである。

御土居の中で唯一造られた暗渠（悪水抜き）

歴史的な風情が残る御土居

太刀　恒次（重要文化財）

脇指　猫丸（菅公の守刀）

太刀　助守（重要文化財）

太刀　國広（重要文化財）

青もみじ公開にあわせて
名刀を一堂に展覧
――宝物殿特別展「宝刀展」

天神信仰は学問のみならず多岐に亘っている。

当宮が所蔵しているおよそ八十振の刀剣がまさにそれを物語っているが、文芸の神として崇敬されている一方、戦国時代には武運長久を願う大名武将らの信仰が篤く、数多くの刀剣が奉納されてきた歴史がある。

所蔵の中で最古の刀とされるのが、銘安綱号「鬼切丸」（別名髭切）。平安時代後期の刀であり、『鬼切丸伝来記写』によれば、源満仲が長男の頼光に与えて以後源氏の家系へ代々相伝され、明治十三年に最上家から当宮に奉納された。

豊臣秀頼公奉納の太刀銘「國広」は、慶長十二年（一六〇七）、社殿造営に際し奉納された重要文化財の太刀で、茎に刻んだ「慶長十二年」の年号や「北野天満天神豊臣秀頼公御造営之時」の銘は、歴史的にも極めて貴重なものといえる。

その他、加賀前田家が五十年ごとの大萬燈祭に奉納した銘「恒次」、銘「備州長船師光」、銘「助守」など、重要文化財の名刀を含むおよそ三十振の刀を展覧する。

宝刀展監修の京都国立博物館名誉館員の稲田和彦氏は「数ある社寺の中でも、北野天満宮は所蔵数といい、質といい、大変素晴らしく、展覧の意義は非常に大きい」と話されている。

昨今は「刀剣女子」と呼ばれる刀剣に興味を示す女性や、海外からの参拝者の来訪も多く、アニメやゲームなどでも刀剣が取り挙げられていることもあり、青もみじの公開にあわせ、多くの拝観者が期待される。

期間限定の御朱印を受ける多くの参拝者

女性を中心とした若い世代や外国人観光客など多数拝観

北野・東山遊楽図屏風

所蔵：北野天満宮
形態：六曲一双　本間屏風
時代：江戸時代前期（17世紀後半から18世紀初頭頃）

左隻　北野天満宮

右隻　東山界隈

「北野・東山遊楽図屏風」を初公開

――四月二十八日から宝物殿で春期非公開文化財特別展

青もみじ苑公開中の四月二十八日から五月七日まで、宝物殿では京都古文化保存協会による「春期京都非公開文化財特別展」が開催され、所蔵の「北野・東山遊楽図屏風」を初公開する。

「北野・東山遊楽図屏風」は、右隻に祇園社・建仁寺・清水寺を描き、左隻には北野天満宮を配置する六曲一双の本間屏風。江戸時代前期（十六世紀後半～十七世紀初頭）に描かれた。それぞれの名所は遊楽客に溢れ、繁華な京の様子を伝え、とくに左隻の北野天満宮では、五扇・六扇にまたがり酒宴と輪舞が描かれ、特徴的にうねる影向松と合わせて本作の主題を明示している。

北野天満宮の拝殿には廻廊がめぐらされ、慶長十二年の豊臣秀頼公による造営後の姿であることが確認できる。また人物の風俗、とくに女性の髷の形は寛文美人図のそれをイメージさせ、本作が江戸時代前期の京都社会を一つの理想的な規範として捉えている。

本作は、江戸時代を通じて洛中洛外図の展開過程と多分な影響を与え合いながら豊富に作成される絵画ジャンルといえ、江戸時代初頭から前期における町場の開発、とくに下ノ森や上七軒の都市的発展は、前代に例を見ないものであり、北野社が中世以来の信仰の場から次第に遊興の場としての性格を強くしていく様子を表している。本作でも往来の人の袖を引く遊女が象徴的

御本殿（豊臣秀頼公造営）
廻廊がめぐらされているところから、慶長12年（1607）の造営後の社殿の姿で、八棟造が象徴的に描かれている。

東門

右近馬場
右近馬場は、右近衛府の施設で馬の調教や乗馬の訓練、騎射の場として使われるとともに相撲、桜の名所といった「遊興の地」でもあった。

往年のスーパーカーが一堂に集結（右近馬場）

北野天神太鼓会が和太鼓を披露

に配されており、都市として飛躍的に発展する北野社周辺状況を物語るなど、北野社頭図の研究を進める上で重要な分析資料の提示であり、資料的な価値は極めて高いと考えられる。

往年のスーパーカーが勢ぞろい 牛のエンブレムがご縁 五月十四日 交通安全祈願参拝

牛のエンブレムで有名なランボルギーニなど、往年のスーパーカー約二十五台が五月十四日、青もみじ公開期間にあわせて交通安全祈願のため当宮に参拝する。

イタリアの高級車でその名が知られるランボルギーニのエンブレムは牛。天神さまのお使いとされるのが、まさに牛であるご縁から、毎年天神さんの総本社である当宮で交通安全祈願の参拝を行っている。

約五十人のスーパーカー愛好者が御本殿にて祈願、牛舎に交通安全の願いを書いた絵馬を奉納する。お祓いを受けた車は、境内滞在の間、参拝者に展覧され、自由に見ることができる。

境内は、清々しい新緑の青もみじが見頃を迎え、多くの観光客や修学旅行生が参拝する時期。ランボルギーニやフェラーリ・ポルシェなど一台数千万円の超高級車の前で、神若会北野天神太鼓会のパフォーマンスも繰り広げられる。

ランボルギーニのエンブレムは牛

天神様の神使である牛

北野経王堂（きたのきょうおうどう）

主に室町幕府が主催した「万部経会（まんぶきょうえ）」が行われた施設。「万部経会」とは、千人の僧侶が十日間にわたって法華経一万部を読誦する法会。明徳2年（1391）に起きた明徳の乱の戦没者を供養するために、応永2年（1395）に、足利義満が「北野南馬場」で行った法華経一万部の読誦が始まりとされる。万部経会は貴賤を問わず多くの人が聴聞に訪れ、興行地としての北野が形成されていく上で大きな影響を与えた。

大きさ　長三十間　横二十五間
（約59m×約49m）
※現在の東大寺とほぼ同じ大きさ

経王堂の前ではにぎやかに酒宴が催されている

特徴的にうねる影向松

天神さまと私

「北野はお茶やお菓子を楽しむ 機会を与えてくれる北野大茶湯ゆかりの地」

京菓子司 末富 山口富蔵 さん

山口富蔵氏

今号は、十二月一日の献茶祭において飾り菓子を展示される江戸時代の禁裏ご用達「上菓子仲間」の流れをくんでいる京都の老舗和菓子店の組織「菓匠会」の会員であり、軽妙な語り口でテレビや講演にひっぱりだこの京菓子司・末富の山口富蔵さん（八〇）＝京都市下京区＝をお招きし、京菓子にかけた六十年の人生をお聞きした。

「数年前、うちの家からこんなもんが見つかりましたんや」と山口さんは開口一番、一幅の掛け軸を机の上に広げられた。軸には亀の絵が描かれ、「千歳一隅 鐵斎揮毫」とある。

「これ、千年萬燈祭の時に亀屋会の茶店に鉄斎さんが来はって、描いたんです。それを亀末廣のご主人からもろうたもんやと思います。亀屋会やから亀の絵なんでしょうね」と、箱書きを示された。なるほど、それには「亀屋会北野千年祭の節御土居ニ茶寮を開く時ニ富岡鉄斎翁来遊画之 亀末廣主記之（判）」と、来歴が書かれている。

千年萬燈祭は、明治三十五年（一九〇二）の春に斎行されており、亀屋を商号とする亀屋会十六店のお菓子屋さんが、御土居の上に茶店を並べたことは、社報4号の「思い出写真館」でも紹介した。その茶店へ、あの著名な南画家、富岡鉄斎（一八三六―一九二四）がやって来たことなど当宮の記録にはない。鉄斎の絵はたくさんあっても、鉄斎が千年祭で御土居に設けた茶店で描いた作品とあれば、当宮と末富にとっては、一点限りの貴重な〝おたから〟ということになる。

千年祭の記録には、亀屋を号する十六店の店名がすべて載っ

富岡鉄斎筆 亀之図

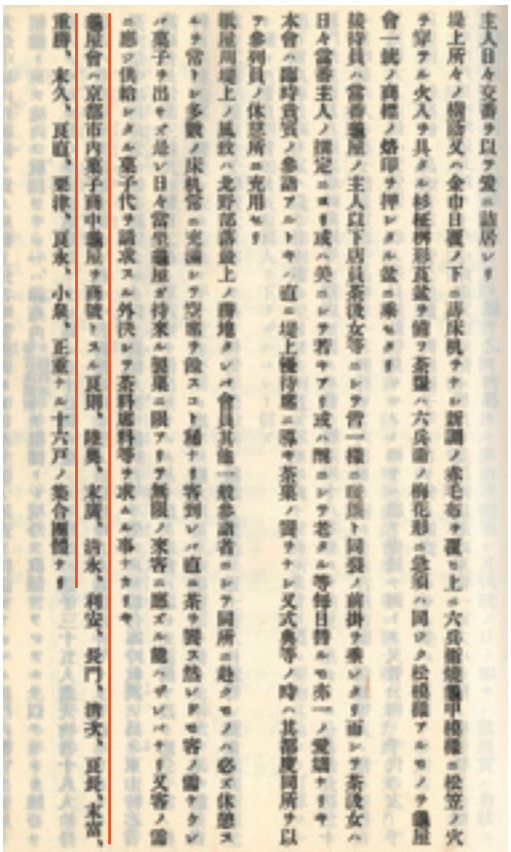
御土居 紙屋川堤上（明治三十五年）写真右に亀屋會の文字が見える

ており、もちろん末富の名もあるが、「今では随分減りました」と、山口さん。末富は、江戸後期創業の亀屋末廣（亀末廣）からの分家で明治二十六年の創業。山口さんで三代目。修徳小―成徳中―堀川高と進み、昭和三十五年、関西学院大経済学部の卒業。一年間、東京銀座の煎餅製造・販売店で働きすぐに家を継いだ。「高校の時、母親が亡くなり、姉三人に男は僕だけ。継ぐもんやと思うてたんで、すんなりです」。

「当時、従業員がたくさんおり、教えるというより”見て覚えよ“でしたね。父から徹底的にやらされのは配達ですよ」と当時を述懐された。「裏千家さんなんかも、今の大宗匠のお母さんがお元気で、何かにつけてかわいがってくれはりました」。外回りをすることで、届けたお菓子がどういう使われ方をするのか、どういうものが求められているのか、などなど身をもって知ることができたという。また、「京の菓子屋は、菓子を造っていただけではあかん。いろんな知識を持ってなあかん」と、よくいわれ、父親は美術館・博物館などへも熱心に連れて行ってくれたという。公家文化とともに栄えた京菓子造りへの父親の誇りが見られ、今や「その通りだった」とうなずけるという。

「京菓子の基本は手造りであり、機械化したらあきません。一つずつ違っており、単なるスイーツではありません。色遣いまで品よくせんとあかんのです。少し大仰に言えば、平安時代の女性の文化が今に息づいているんです」「京菓子には、ぴったりとした名をつけることも大事なんです。例えば、梅の菓子一つにしても”北野の春“とつければ、天神さんや紙屋川の様子を思い浮かべて楽しみながら食べてもらえるんですから」……とお菓子の話しになったら止まらない。

とはいえ、お客さんを茶菓で接待するような風習が薄れ、大量生産の



天満宮千年祭 北野會誌に残る亀屋會の記述

「北野大茶湯」ゆかりの地と讃えられる境内で開催されたKYOTO NIPPON FESTIVALにて出店

お菓子が出回る現代だけに京菓子のピンチであることには間違いはない。本を出版したり、テレビ・講演にも、声がかかれば積極的に出る。「そんなもん出たらあかん、という人もいますけど、僕は一にも二にも京菓子のPRやと思っています。お菓子は、元々公家文化であり、京の文化が詰まっています。京菓子がなくなることは、京都がなくなることやと思っています。もっともっと宣伝して、京菓子の面白さを知ってもらい、食べてもらわなければ」と力を込められた。

最近、極力控えるようになったのは、車の運転だが、お得意さんが注文に見えれば店先にも立つし、菓子造りの陣頭指揮をすることもあるとか。「みんな止めるんですが、東京の得意先には、新幹線に乗り、三百個ぐらいは両手に持って運びますよ」と元気一杯である。

さて、冒頭の亀屋会の御土居の茶店について「菓子屋のこんないい時代があったことは誇りですよ」。孫の大学生の男の子が、どうやら五代目を継いでくれそうなのがうれしという。

末富といえば、昨年十二月の当宮で開催された「KYOTO NIPPON FESTIVAL」の「フード&ショップ」にも出店され、人気を集めた。「あのような新しい催しは、一回に終わらず二回、三回と続けていってほしいです」と注文も出された。そして、「北野天満宮は、太閤さんの北野大茶湯ゆかりの地です。お茶を飲み、お菓子を楽しむ機会をもっと増やして頂ければありがたいですね」と結ばれた。

「昭和大茶湯」會記（昭和11年）

昭和大茶湯（昭和11年）の折、
使われた菓子型によって復元された菓子

飛梅「紅和魂梅」は約三百五十年前に接ぎ木

DNA検査で判明、代々接ぎ木で継承か
培養苗木の生育順調、”平成の飛梅伝説“構築へ

接ぎ木によって受け継がれてきた飛梅「紅和魂梅」

飛梅伝説伝承木とされる本殿前の飛梅「紅和魂梅（べにわこんばい）」のDNA検査が住友林業によって進められていたが、少なくとも江戸時代前期の三百五十年前には接ぎ木をされていたことがわかった。三月九日、社務所で行われた住友林業と当宮による記者会見で発表されたもので、接ぎ木によって代々「飛梅」が守り継がれてきた可能性も出てきており、信仰上からも喜ばしい結果となった。

御神木の「紅和魂梅」をウイルス病から守るため、組織培養による苗木増殖に取り組んでいる住友林業が、下部（根）と上部（枝）のDNAを調べた結果、それぞれ異なる遺伝子を持っており、接ぎ木されたものとわかった。接ぎ木の時期については、幹回りなどから少なくとも三百五十年前と推定している。

「飛梅」について北野天満宮古記録には「延喜七年（九〇七）二月廿七日紅梅殿ノ梅安楽寺へ飛而参、単紅梅也」の記述があり、菅公薨去の四年後に京の都から太宰府へ飛梅が伝わったとされている。さらに、当宮所蔵『宮仕日記』の寛政五年（一七九三）十一月二十五日の条によれば「庭上の梅の木は、いわゆる飛梅種に間違いないが、飛梅木の石碑を建てるかどうか」といったやりとりが、当宮と京都西町奉行所の間で交わされており、江戸時代後期にはすでに「飛梅伝承」の御神木として特別視されていたことがわかっている。

古くより全国各地の菅公ゆかりの地に伝わる「飛梅伝説」は枚挙にいとまがないが、今回江戸前期に接ぎ木されたものと判明したことで、当宮の「飛梅」は代々接ぎ木によって守り継がれてきた可能性が高くなり、信仰上極めて重要な意味を持つと考えられる。

また、菅公の御心が宿った「飛梅」の組織培養によって増殖された苗木は順調に生育しており、移植が可能となった時点で里帰りをさせて「種の保存」に努めるとともに、菅公ゆかりの飛梅として後世に渡って守り伝えていく方針である。

「江戸前期に接ぎ木をされていたということは、御神木の飛梅伝承は、もっともっと古くからあったのだと思う。限りなく往時の梅に近いともいわれているこの御神木の調査・研究を今後も進めて頂き、科学的に時代を遡ることができればうれしいことです」と宮司は感想を述べた。

里帰りした飛梅の苗木

全国各地の天神社に飛梅を

京都 平安京の天門

厳かに梅花祭を斎行　厄除信仰の北野天満宮

「古例により、畏くも皇后陛下の御代拝が参向」

皇室祭典と神社祭典がひとつに斎行される、全国でも類を見ない祭祀

御代拝参向による御拝礼（宮内庁京都事務所長）

北野天満宮では、毎年二月二十五日、九州大宰府の謫居にて薨去された菅公の御遺徳を偲び、その御神慮を景仰申し上げる祭典、「梅花祭」を斎行している。

この祭典は、文献『北野誌』によれば鳥羽天皇天仁二年（一一〇九）二月二十五日に執行されていたと記録が残り、約九百年もの歴史があるが、御祭神の御遺徳を偲ぶ重要祭祀として、創建当初より連綿と続けられてきた神事と思われる。

三種の祝詞を奏上し、貞明皇后行啓の古例により畏くも皇后陛下の御代拝が参向され御拝礼、また西ノ京の神人（じにん）による「梅花御供（ばいかのごくう）」の奉饌が行われる。

梅花祭は大祭に準ずる祭典として位置づけられ、当宮で斎行する年間凡そ一五〇を超える祭典の中で最も重要な神事の一つである。皇后陛下の御代拝（現在は宮内庁京都事務所長）が参向されて行われる御拝礼は、神社としての祭典と皇室の祭典がひとつになって斎行される全国的にも類を見ない珍しい祭祀のかたちであり、御皇室と当宮の御縁の深さを色濃く表している。

七保会 吉積 徹宰領による「奉幣の儀」

御代拝参進

紅梅殿前では華やかに野点大茶湯を開催

紅梅殿前の船出の庭では、豊臣秀吉公の「北野大茶湯」にちなむ恒例の「梅花祭野点大茶湯」が華やかに催された。美しく咲き誇る紅白の梅花の下、上七軒歌舞会の芸舞妓によるお点前で一服を楽しむ参拝者で終日、大賑わいを見せた。

五十種・約千五百本の梅の花は、ちょうど見ごろ。日差しが暖かく感じられる土曜日の縁日とあって多くの露店が並ぶ表参道や御本殿前は、初詣並みの混み具合となった。

梅花祭は厄除に通じる祭典

西ノ京 神人による「梅花御供」奉饌

梅花祭には、この祭典にあわせて北野独自のお供えがあり、これは厄除・災難除に通じるものとして信仰されている。

特殊神饌である「梅花御供」は、古くは御神霊を宥めるのと音の通じる菜種の花を供え「菜種御供」と称していたが、明治の改暦以降、菜種の花に替わり梅の花を用いたことから「梅花御供」と呼ばれている。この御供は、四斗の米を蒸し、大・小二個の台に盛ったもので、「大飯」・「小飯」と称され、古くより西ノ京に住む当宮の神人の末裔で組織する「七保会」の会員が二月二十四日に精進潔斎し、浄火を用いて謹んで調製された特殊神饌である。また、白梅・紅梅の小枝を挿した「紙立」と称される特殊神饌も同時に謹製され、男女の四十二・三十三の厄年に因み、白梅を挿した紙立四十二組と紅梅を挿した紙立三十三組が共に御神前に奉饌される。この紙立は、仙花紙を筒状にし、底に小さなかわらけを敷いて、中に玄米を入れ、梅の小枝を挿し立てたものである。

なお、この「紙立」の調製に用いた玄米は古くよりご飯に炊き込んで戴くと災難・厄除・無病息災であると伝えられ、神社では「厄除玄米」として広く参詣の人々に授与している。

特殊神饌「梅花御供」

厄除玄米

紙立を供す

大飯・小飯を供す

先づ梅花を供す

神職の冠には菜の花

見頃の梅に囲まれて華やかに野点大茶湯開催

北野天満宮にみる厄除信仰の諸相

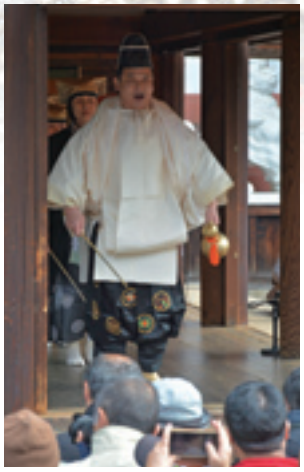
平安京の北西、乾の天門に祀られる北野天満宮は、もともと神を祀る聖地に創建されている。承和三年（八三六）この北野の地に天神地祇を祀り、遣唐使派遣の成功を祈願したとあり、御本殿の真裏に鎮座している地主社がそれであり、その後菅公の御神霊を同じこの地に鎮めた。

また、平安時代の天子様の住まわれる大内裏、大極殿は北野天満宮のすぐ南に位置し、帝が当宮を遥拝される際には、三光門の真上に北極星が輝くのである。北極星の瞬く天門に鎮座する当宮は、天のエネルギーが満ちる三辰信仰（太陽・月・星に対する信仰）の聖地であり、皇城鎮護の神として崇められるとともに、古くより北野天満宮の天神信仰は、学問の神としての信仰のみならず全ての厄災消除の御神威、つまり厄除信仰としての御神徳が今日まで伝えられている。

節分祭

邪気・厄を祓い、開運招福　二月三日

節分には、神楽殿にて茂山千五郎社中により北野追儺狂言が奉納される。これは、摂社 福部社を題材として作られたもので、福部社の神が鬼・邪気をやらい、福を招く所作が表現される。「ふくべ」は瓢箪の和名で、狂言の道具として使われるが、これは「ふくべ」（瓢箪）に込められた御神威を発揚することによって鬼を追い祓い、開運招福を祈願して演じられる狂言である。


追儺狂言に見るひょうたん

「四方詣り」――京都では千年以上昔から、節分会に四方鬼門に当たる四つの神社仏閣にお参りする事を「四方詣り」という。深泥池からやってきた鬼（邪鬼）は、北東・南東・南西に現れて追われ、最後に北西の「北野天満宮」に現れる。当宮では鬼を追わず福部社に閉じ込め、邪気を祓い、開運招福を願うのである。

「桃」に守られた北野天満宮御本殿

桃の彫刻に秘められた大願

豪華絢爛 御本殿の装飾

桃は古来よりその呪術的力により、災難消除の霊力があるとされてきた。鬼門除けに桃符を用いることが見られるが、御本殿正面には、巨大な三つの桃が、あたかも鎮まります御祭神を諸々の災難から守るかの如く刻まれ、御祭神の御神威を昂めている。

御本殿彫刻に秘められた祈りは、千有余年に亘る天神信仰の変わらぬ願いであり、災厄消除の御神徳の発揚の表れと考えられる。

◆桃（災難除の霊力）による防御と御神徳の力

桃はその生命力により、生育・多産・不老長寿の象徴として古来より信仰されてきたが、一方、様々な悪霊駆逐や撲滅などの呪力、其の霊異性・呪術的効能が時代と共に信仰され続けて来たことの意味は大きい。

日本の古典である『古事記』・『日本書紀』には、黄泉国を訪問したイザナギノミコトが、穢れたイザナミノミコトを見て逃げ出し、追手の軍を追い祓うため、黄泉比良坂の麓に生えていた桃の実を三つ投げて難を逃れたという黄泉国神話があり、この神話をもって、我が国の桃が邪鬼を祓う神秘力、桃の呪術的信仰の始めとする。以来桃の呪力に関する伝承、とくに鬼を追い祓う桃の呪力に対する伝承が多くみられる。

鬼を避けるために桃を用いることは、平安時代半ばの律令施行細則『延喜式』に、追儺の儀式に桃が祭具として登場することでも知られ、桃弓・葦箭・桃杖などを用い、現在でも各地で追儺式が行われている。

御本殿石の間上部に彫刻された桃

重要文化財「木造鬼神像」邪気、厄災を祓う岐神（ちまたのかみ）・八衢（やちまた）の神（かみ）

平安京の庶民信仰を包み込む天神信仰

十三鬼神像

平成十四年（二〇〇二年）の千百年大萬燈祭の折、御本殿の深奥より発見された憤怒の形相をした木造鬼神像。

平安時代の有職故実書の天慶元年（九三八）の記事に取り上げられている邪霊の侵入を防ぐため平安京の街路の辻々に立てられた岐神（ちまたのかみ）・御霊であることがわかり、国の重要文化財に指定されている。

平安京町衆（庶民）の信仰

像の一体は『北野天神縁起絵巻』にある日蔵（道賢）上人が吉野・金峯山で入滅、六道巡りをした際に上人を導いた蔵王権現の原型と見られ、こうした岐神あるいは八衢の神が御本殿内に秘匿されたのは、天神信仰が平安時代の御霊信仰を包み込んでいったことの証左であり、その証が一千年の時空を超えて蘇ったといえる。

平安京の誕生

飛鳥・大和時代に仏教を始め外来文化が伝来し、『日本書紀』の用明天皇の条に「天皇仏法信けたまい、神道を尊びたもう」と記されるように神仏習合ともいえる文化が始まった。歴代天皇は律令国家建設に務められ、延暦十三年（七九四）、桓武天皇は山背の国に四海平安の祈りを込めて平安京を建設され、千二百年に及ぶ文化の都・京都が誕生し、日本文化の礎となったのである。

「和魂漢才」の精神 ―菅公の出現

平安京遷都から五十年後に出現された菅公は、政治家であり、類まれなる学者・詩人・教育者として、縄文からの美的感性を大切にしながらも「和魂漢才」の精神で外来文化との和合の道を示した。後に「文道大祖 風月本主」と崇められ、村上天皇の天暦元年（九四七）、平安京の最も重要な乾（北西）の天門に菅公を祀る北野社が創建され、そして一條天皇より北野天満天神の御神号を賜り平安京で誕生した「天神さま」は、全国にその御分霊が伝播し、学問や芸道・正直・厄災消除の神など様々に展開して信仰は広がり、今日に至っている。

北野天神縁起絵巻［巻七］ 日蔵（道賢）上人を導く金剛蔵王菩薩

平安京の「天門」、天神となって全国へ伝播

さて、十三体の鬼神像のうち二体については、年輪年代法によって九六三年、九七一年の年代が判明。当宮の創建年代と極めて近いことがわかった。平安時代、死霊を怖れた民衆が造り、祀った素朴な神像が破棄されることなく今に伝わることは稀有のことであり、またそれが当宮御本殿内に秘匿されていたところに大きな意味があるといえる。

千年の時を超えて再び世に出た十三体の木造鬼神像は、天神信仰の奥深さを感じさせる神々なのである。

平安京の乾（北西）の天門に位置する北野天満宮

蔵王権現の原型と見られる像

北野神輿の比類なき歴史（二）―描かれた北野祭礼―

朝廷より勅使がたてられ、幣帛が奉られる重要祭祀

京都文化博物館学芸員　西山　剛

描かれた勅祭 北野祭の姿

行列の先頭に御幣を捧げる

『北野祭礼絵巻』は絶大なる天神信仰の繁盛が描かれる

勇壮で華やかな祭礼は、その時々の時代で、様々に絵画化されてきました。ときには屏風絵として、ときには絵巻として伝わる祭礼の描写は、私たちが過去の祭礼の姿を知る重要なよすがになります。北野祭礼の場合、北野天神縁起絵巻の一部として作成されることが圧倒的に多く、絶大なる天神信仰の繁盛が豪壮な神輿行列の姿で象徴的にあらわされます。

現存する天神縁起の中で、北野祭礼の様子を伝えるものとして神奈川県立歴史博物館が所蔵する作品、三重県・杉谷神社が所蔵する作品、大阪府・佐太天神宮が所蔵する作品などが有名です。

北野祭は朝廷が主催する特別な祭礼（勅祭）

十世紀後半に始められた北野祭は朝廷が主催する特別な祭礼（勅祭）でした。その威勢は室町時代に至っても継続し、絵画作品の中においても、象徴的にそのことが伝えられます。ここで紹介する『北野祭礼絵巻』（北野天満宮蔵）では、長い長い行列の先頭をいく大きな御幣がそれにあたります。

他の作品は、巻子の中のごく一部が祭礼の描写にあてられますが、この作品は一巻のすべてが祭礼描写にあてられており、神輿行列を構成する多くの要素が描かれます。本稿では描かれた祭礼に分け入って、にぎやかな北野祭礼を観察したいと思います。

御幣を捧げ持つ姿が特徴的に描かれている

朝廷に所属する禁裏駕輿丁により舁かれる御鳳輦（右側）・葱華輦（左側）

勇壮に描かれた北野祭礼

絵巻を広げて、まず真っ先に目をひくのは、大きく描かれる二基の神輿です。一つは鳳凰を乗せた鳳輦、もう一つは葱花を乗せた葱華輦です。両方とも六角形の神輿として描かれています。よく見ると屋根にはしっかりと梅鉢紋が据えられ、この神輿が天神のものであることを明示しています。周辺には神輿を一目見ようと、老若男女が駆け寄り、その中には僧侶の姿も確認できます。

神輿の前には色とりどりの狩衣と折烏帽子を着た人物たちが馬にまたがっている様子が描かれます。騎馬行列の中ほどには馬が暴れ、ふりおとされないようにしがみつく藍色の狩衣の人物も描かれています。この一連の騎馬行列は、縁起を参照すると、神馬十列（いわゆる競馬）であることがわかり、さきほどの暴れる馬の描写は十列の勇壮さを表したものと考えられます。

北野社に所属する社人の行列

この競馬の前には、烏帽子を被り、白色の狩衣を着た人物が徒歩で行列を構成している様が描かれます。総勢二十一名の人物たちは、一人一人顔の様子を違えて個性が与えられており、絵師の丁寧な仕事ぶりがうかがえます。この一群の人々は、着装する狩衣から考えても、北野社所属の社人だと考えられます。

この行列の前方には、さまざまな芸能が展開します。赤く大きな獅子頭をつけた舞人、大鼓と鉦に合わせて進む花笠と鶴舞、鼻高面と黒面をつけ対になって舞う舞人、棒振や高足、拍子木をうちならして円舞する女性たち、二匹の獅子舞などなど。これら数々の芸能は、一義的には神に対して捧げられたものです

勇壮な騎馬行列

様々な芸能行列

が、もちろん沿道で見物をする人々の目や耳も喜ばせました。耳をすますとまるで音色が聴こえてきそうなほど臨場感に溢れたこの描写は、この作品における最も重要なモチーフであることを示しています。

この賑やかな芸能の場面のさらに前には、馬に乗る女房の姿が添えられ、その前には武装した僧侶の行列が続きます。彼らは全て犀棒（先端に丸い突起がつく呪具）を持っており、神輿とその行列を警護する役を担っていたことがわかります。この一群の人々が何者なのか、今は断定することはできませんが、かつての北野天満宮には多くの社僧が存在したことを考えると、実務を担う下級の僧である可能性を想定しておくべきでしょう。

勅使参向のもと、北野社に官幣（幣帛）を奉る

そして長い祭礼行列の先頭には、御幣を頭上に捧げもつ浄衣を着した人物が描かれます。冒頭でも述べたとおり、古代・中世の北野社は朝廷の関わりが深く、祭礼においても大蔵省から勅使（天皇の使者）がたてられました。この勅使は官幣といわれる幣帛を北野社に奉り、北野社はこれをきっかけとして神輿神幸を開始しました。このような幣帛の実態がいかなるものか、今は明らかにすることができませんが、ここに見られる行列先頭の御幣の奉持も、このことと無関係ではないでしょう。行列の先頭という特別な位置付けには、祭礼行列においてなによりも優先されるもの、という意識がこめられていると考えられるからです。

ここで紹介した作品は、現存する北野祭礼の描写の中で、もっとも豊富にその内容を捉えていることは先に述べた通りです。ではなぜ、江戸時代に入ってこのような傑出した祭礼絵巻は登場してきたのでしょうか。このことを考えるには、北野祭礼が持つ固有の歴史を追う必要がありますが、紙幅の都合上、今号は絵巻の紹介までとし、次号であらためてこの問題を考えてみたいと思います。

延暦寺の僧兵たち

丁酉 初詣

三が日穏やかな好天 境内、参拝者で埋め尽くす
「無病息災」「学力向上」「平穏な年に」様々な願い込め、人、人、人……

好天に恵まれ、初詣参拝者でにぎわう御本殿前

酉年の初詣は、三が日とも絶好の好天に恵まれ、「無病息災に過ごせますように」「学力が向上し、入試がうまくいきますように」「平穏な年でありますように」などなど様々な願いを込めた参拝者で大賑わいとなり、境内は三日間とも人、人、人で埋め尽くされた。

三が日の京都市内の最高気温は、元日一三・五度（平年九・七度）、二日一二・六度（同九・七度）、三日一三・一度（同九・五度）と、いずれも一〇度を上回る穏やかな好天となった。境内の梅も一気につぼみを膨らませ、見事な咲きっぷりの紅梅や白梅もあり、カメラやスマートフォンをかざして撮影する人が相次いだ。「暖かくていいですね」「たくさんご利益がもらえそうな初詣となってうれしいです」と言った言葉も聞かれた。

初詣参道

新春を迎える神事は、十二月三十一日午後四時から本殿前で斎行された年越しの大祓で始まった。約百五十人の神社役員・崇敬者らが参列し、神職と共に大祓詞を奉唱し、一年間の罪や穢れを祓った。同七時から本殿で除夜祭、同七時半から摂社火之御子社神前で鑽火祭を斎行し、古式によって浄火を鑽り出し、同十時からは参拝者への火縄授与が始まったが、大晦日の参拝者は例年を凌ぐ多さで、そのまま新年の初詣へと繋がった。

新年最初の神事である歳旦祭は、元日午前七時から本殿において宮司以下神職により厳かに斎行され、世界の平和・国家の隆盛・皇室と氏子崇敬者の弥栄を祈願した。

本殿前の中庭は、連日神前に祈りを捧げる人で埋まり、参拝者の行列が三光門と絵馬所の間まで続く日もあった。授与所はどこも学業のお札・お守り、各種の縁起物などを求める参拝者の行列ができ、梅の枝「思いのまま」の授与も相変わらずの人気ぶりを見せていた。

受験シーズン入りを間近に控え、牛舎・絵馬掛け所も志望校を書いて敬虔な祈りを捧げる若者や家族で終日、にぎわいを見せた。

参道や境内一帯は、隙間のないほど多くの露店が並び、参拝者があまりにも多いため、しばしば歩く足が止まるほどの賑わいとなり、「毎年天満宮に参拝しているけど、こんなに人が多いのは初めて」という声もささやかれていた。

御朱印受付には長蛇の列

神前書き初め『天満書』―書道上達・学力向上を祈願

筆始祭

書道の神としても知られる菅公を偲んで一月二日午前九時から本殿で筆始祭を斎行、書に親しんでいる人たちの技術の向上を祈願し、この日から「天満書」を開始することを奉告した。

力強く筆ふるい、作品奉納

神前書き初めの「天満書」が一月二日から四日まで絵馬所で行われ、初詣の子どもや大人が力強く筆をふるい、書き上げた作品を奉納した。

「天満書」は、天神さまの神前で書き初めをし、書道の上達・学力向上を祈るもので、当宮では昭和二十七年以来行われている恒例行事。三日間で千四百十三点が奉納された。これに家庭で書いて奉納された作品千六百六十四点も加え、今年の「天満書」の奉納作品の総数は三千七十七点となった。

入念な審査、千七点が入選 全作品を西廻廊で展示

「天満書」として奉納された全作品の展示が、一月十九日から二十八日まで本殿前西廻廊と絵馬所で行われた。

審査は展示初日の十九日午前九時半から書家の日比野実・山本悠雲・岡本藍石・大原蒼龍・松丸濤山の各先生と橘宮司により入念に行われ、神前の部四百五十二点、家庭の部五百五十五点の合わせて千七点の入選作が決まった。

入選者授賞式 宮司より賞状を授与

入選者の授賞式は一月二十八日午後三時から本殿で、天満宮賞など特別賞に輝いた子どもやその家族が参列して行なわれた。

式に先立ち奉告祭が斎行され、参列した子どもの代表が玉串を捧げ、それに合わせて全員が拝礼し、書道の上達と学問の向上を祈願した。授賞式では、橘宮司が「入選おめでとう」と一人ずつ賞状と記念品を手渡した。

入選者は次のみなさん。

【神前の部】

〈天満宮賞〉 髙橋壱樹（月かげ保育園年長）、森田愛彩（千代川幼稚園、五歳）、岡本夏凛（愛知川東小一年）、齊藤樹の（亀岡市立安詳小二年）、松浦拓夢（大井小三年）、長谷川青葉（詳徳小四年）、新江田光希（安詳小五年）、山畠祐希（養父市立伊佐小六年）、藤井姫流（西賀茂中一年）、市野月菜（桑名市立長島中二年）、神谷愛里朱（亀岡市立東輝中三年）、強田亜美加（洛北高一年）

〈京都新聞特別賞〉 伊藤紗衣（高倉小二年）

〈京都新聞賞〉 篠原梓沙（朱雀第三小一年）、原天音（ノートルダム学院小三年）、冨田莉羽（朱雀第一小四年）、中瀬蒼彩（桂坂小五年）、豊住勇希（鷹峯小六年）、川勝雅登（旭丘中一年）、宮出柊（南桑中二年）

〈鳩居堂賞〉 中村颯佑（志賀保育所年長）、伴野倫瑠（平野小一年）、平井隆一（つつじケ丘小二年）、古島利一（御所南小三年）、梅名右郷（嵐山小四年）、勝政光輝（梅小路小五年）、西岡聖乃（向日市立第六向陽小六年）、桒名創太（東城陽中一年）

〈金賞〉 髙橋倫斗（白子小一年）始め百六十八人

〈銀賞〉 渡辺夏々香（山階南小一年）始め二百五十六人

【家庭の部】

〈天満宮賞〉 小川健（大徳寺保育園年長）、八幡亮太朗（明徳小一年）、山中陽菜乃（伏見住吉小二年）、原天音（ノートルダム学院小三年）、岡崎百恵（伏見住吉小四年）、藤本真凛（魁書道會五年）、松尾未咲（栗東市立大宝東小六年）、今江七菜（同志社中一年）、石原早樹（洛南中二年）、藤井寿大（西賀茂中三年）

〈京都新聞賞〉 藤井茜里（魁書道會一年）、矢賀谷あかり（三山木小二年）、岩佐春希（亀岡市立城西小三年）、澤田あやめ（上賀茂小四年）、花岡月（柊野小五年）、舩越望乃（大久保小六年）、桒名創太（東城陽中一年）

〈鳩居堂賞〉 上村理菜（三山木保育所年中）、立田優羽（明徳小二年）、奥陽詩（伏見住吉小三年）、梅名右郷（嵐山小四年）、安田伊志（一燈園小五年）、梨本優衣（柊野小六年）、中野葵（洛南高附属中二年）

〈金賞〉 藤田真由南（御所南小一年）始め二百九人

〈銀賞〉 多田好花（上賀茂小一年）始め三百二十二人

〈審査員の講評〉

西歳とあって「鳥（酉）」「飛躍」といった字が目についた。自分の気持ちを素直に書いている作品が多く、年頭に当たって一つの言葉を選んで書いているという感じがした。神前の部においては、地元ではなく、初詣を京都で過ごそうと来た人たちが、一家で出品しているケースが見られ、北野天満宮の長い「天満書」の歴史があればこそで、大変うれしい。もちろん、こどもの作品が多かったが、例年に比し、一般の方の奉納が多かったように感じた。中学二年生より三年生の作品が多いのは、入試祈願に参拝し、天神さまへの願いを込めての奉納だろう。一般の人たちが自由に筆を持ち、作品を発表する機会が北野天満宮にはあり、日本文化を継承していく、という観点からも「天満書」のもつ意義は大変大きい。

「思いのまま」授与
――今年も初詣参拝者に人気

三年前の初天神で約六十年ぶりに復活した招福の梅の枝「思いのまま」が、昨年に引き続き元旦から授与され、初詣参拝者に変わらぬ人気を見せていた。

「思いのまま」は、神域にある約五十種・千五百本の梅の枝を開花前に剪定し、菅公を偲ぶ梅花祭で神前に供える特殊神饌の調製に用いる厄除け玄米入りのひょうたんを取り付けたもので、厄除け・諸願成就などを祈る縁起物。水を入れた花瓶に挿しておけば、赤や白、色とりどりの梅の花が咲くので人気が高く、今年も授与を受ける参拝者の行列ができた。

思いのまま

池坊京都支部の献華展

献華展

華道家元池坊京都支部（中路喜久子支部長）恒例の「新春献華展」が元旦から一月二日まで神楽殿で行われた。

立花・生花・自由花の形で生けられた六点の作品が新春の香をふりまき、初詣参拝者を楽しませた。

女城主「直虎」がお目見え
――楼門の西陣糸人形

井伊直虎見参―。新年恒例、楼門内側左右を彩る西陣つくりもの人形「糸人形」が今年も元旦から五日まで飾られ、初詣参拝者の目を楽しませた。この糸人形は、西陣織工業組合の依頼で、毛利ゆき子西陣和装学院学長の監修によって毛利氏と有志が毎年テーマを変えて制作している。

今年は、NHKの新春からの大河ドラマ「おんな城主 直虎」がテーマ。井伊直虎は戦国時代、遠江（とおとうみ）井伊谷において、女ながらも井伊家を支え、事実上の〝女城主〟として活躍したとされる人。直虎は若き日一時出家したとされ、糸人形は法師姿の直虎と、彼女の指導で井伊家の当主に育て挙げられていく虎松の姿が、西陣の服地や帯地、絹糸を使って巧みにつくられた。話題のテレビドラマの主人公の登場であり、参拝者が次々足を止め糸人形を観賞、説明文に見入っていた。

糸人形

新春奉納狂言

奉納狂言

新春奉納狂言が一月三日午後一時から神楽殿で行われた。猿楽会と茂山良暢氏の主催で、毎年、新春のこの日に奉納されている。

神楽殿の周囲を多くの参拝者が取り囲む中、「末広かり」「鳴子遣子」「酢薑」「清水」「福之神」の五番が次々奉納され、伝統芸能の世界に誘った。

そろばんはじき初め

新春恒例の「そろばんはじき初め」が、一月五日午前十時半から絵馬所で小学生ら約二百十人が参加して行われた。

はじき初めに先立ち全員が昇殿参拝してそろばんの上達と学力向上を祈願した。この後絵馬所に移動、抽選で三人に天満宮賞が贈られた後、フラッシュ暗算をし、長さ五・五メートル、四百桁もあるジャンボそろばんを使ってはじき初めをした。

はじき初め

冷え込む初天神、にぎわう

初天神の一月二十五日、曇り空の厳しい冷え込みに見舞われたが、参拝者の足は終日途絶えることなく続き、例年通りにぎわいの縁日となった。

この日の京都は、最低気温氷点下一・三度（平年〇・七度）、最高気温五・八度（同八・四度）と、平年より寒い一日となった。しかし、表参道並びに境内一円に並んだ食べ物や盆栽、日用品や骨董品などを商う露店では「安いよ」「まけとくよ」という威勢の良い呼び込みの声が飛び交い、防寒着を着込んだ参拝者が次々足を止めていた。

本殿前では、参拝者の行列ができ、牛舎や絵馬掛け所周辺も、絵馬に志望校を書き、祈りを捧げる若者らで終日混み合った。

初天神

初雪祭を斎行

初雪祭

今年初めての雪景色となった一月十五日午前九時半から、一の鳥居東側にある影向松（ようごうのまつ）の前で初雪祭を斎行した。

毎年立冬から立春前日までの三冬間に初雪が降ると、天神さまが影向松に降臨され、雪見をして歌を詠まれる、という伝説に基づいて行われる神事。

豆まきで災厄祓う 日本舞踊も彩り 多彩に節分祭

立春前日の二月三日、本殿で午前十時から節分祭を斎行した。午後一時からは神楽殿において伝統の北野追儺（ついな）狂言・日本舞踊が奉納され、最後は盛大に豆まきをし、今後一年間の災厄を祓った。

京都では節分の日に「四方詣（しほうまい）り」と称し、節分ゆかりの四社寺を参詣する習わしが今も続いており、当宮はその最後を担う重要な社として信仰を集めている。

北野追儺狂言は、摂社福部社（ふくべしゃ）の御祭神の福の神が都を荒らす鬼を追い祓う筋書き。茂山千五郎社中により奉納上演され、「鬼は外！」の掛け声で豆をまかれて鬼が退散すると参拝者から拍手がわいた。この後、上七軒歌舞会の芸舞妓による日本舞踊の奉納があり、最後は狂言師・芸舞妓が一緒になり「福は内！」「鬼は外！」と神楽殿を囲んだ多数の参拝者に向かい、威勢よく福豆袋をまいた。

授与所では、この日終日、災難除けのお札やお守り、銀幣が特別授与された。

節分祭

梅風祭

梅風祭を斎行、講社の隆盛を祈願

崇敬者で組織される梅風講社（小石原満講社長）の祭典・梅風祭が縁日の三月二十五日午後三時半から本殿に約五十人が参列し、斎行された。

祭典には白衣・緋袴姿の八乙女も参列し、「八乙女は……」の歌に合わせ優雅に鈴舞を奉納した。小石原講社長や八乙女の代表が玉串を捧げ、梅風講社の更なる隆盛と講社員の無病息災を祈願した。

祭典後、飛梅「紅和魂梅」が咲き誇る本殿前中庭でも八乙女が鈴舞を奉納し、参拝者を喜ばせた。

前列左より 水谷 凛・田子美來・服部美悠・青山愛実・井鼻悠月・時岡美菜・田子夢乃・泉 珠以

公梅開苑

連日多くの観梅者が訪れた梅香る境内

梅苑は一月二十八日から三月二十六日まで公開し、期間中は全国各地より参拝者が訪れ、菅公ゆかりの梅花を鑑賞した。

特に昨年整備された紅梅殿・船出の庭には、国宝『北野天神縁起絵巻』になぞらえた景観を一目見ようと連日観梅者であふれる盛況ぶりをみせた。

紅梅殿前

船出の庭

北野天満宮のこれからの祭典・行事〈四月～六月〉

四月十三日～十六日

文子天満宮祭

「文子さん」「文子祭」と呼ばれて親しまれている末社文子天満宮の例祭。四月十三日（木）から十六日（日）まで四日間にわたり斎行する。

五月上旬～六月下旬

修学旅行参拝

中学生を中心とする修学旅行中の昇殿参拝。五月上旬から六月下旬にかけて一番のピークを迎える。

四月二十日

明　祭（中祭式）

菅公が薨去されてから二十年後、冤罪が晴れた延長元年（九二三）四月二十日にあたるこの日、その喜びを神前に奉告する祭典を執行。

六月一日

火之御子社例祭

「雷除大祭」の愛称で親しまれる摂社火之御子社の例祭。六月一日午前四時から斎行。祭典後、特別授与品として雷除のお守りやお札を授与するほか、参道には露店が並び終日賑わう。

六月九日

宮渡祭（中祭式）

菅公が平安京の北西（乾）の北野の地に御鎮座された天暦元年（九四七）六月九日に当たるこの日、御本殿にて祭典を執り行う。

五月十七日
献酒祭

酒造組合や酒造会社の代表らが参列し、神前に新酒を供え、よい酒ができたことに感謝するとともに酒造りの安全と業界の繁栄、関係者の息災を祈願する祭典。

六月二十五日
御誕辰祭（中祭式）・大茅の輪くぐり

六月二十五日は菅公の誕生日に当たり、御誕辰祭を斎行。楼門では恒例の「大茅の輪くぐり」を行う。

六月十日
青柏祭

古代より柏の葉は、祭事に用いる神聖なものであった。当宮ではこの日に柏の葉に御飯を包み、神前に供えて日々の神恩に感謝し、季節の変わり目の神事として無病息災を祈願する。

六月中旬
梅の実ちぎり

正月の縁起物として新年の祝膳に欠かす事の出来ない「大福梅」の梅の実摘み取りを当宮神職・巫女・職員ら並びに氏子崇敬者の奉仕により、六月中旬から約一週間がかりで行う。

六月三十日
夏越の大祓

日常無意識のうちに身についた罪や穢れは、古くより六月と十二月の晦日に斎行する大祓式で祓い清められてきた。特に六月の大祓は、「夏越の大祓」と称し、茅の輪神事を本殿前中庭にて斎行する。

献茶祭保存会だより

献茶祭保存会役員らが初寄り

献茶祭保存会役員と平成二十九年の明月舎月釜奉仕者が参会し、献茶祭保存会初寄りが一月七日午前十一時半から明月舎で開催された。「本年もよろしくお願いします」と、橘宮司が挨拶をした後、今年の月釜奉仕者に委託書が交付された。

また、初寄りに先立って社務所で役員会が開かれ、予算案に関する案件などについての話し合いが行われた。

献木

親友会グループ　会長
京都学園　理事長
北野天満宮講社　副会長
田辺親男 佳子 ご夫妻

「古希の祝いとして」

当宮崇敬会「北野天満宮講社」副会長である田辺親男氏ご夫妻が奉納された紅梅一株と白梅一株が、去る三月十日、御本殿西側の神明社横に献木された。

献木

ジャンポール エヴァン 忍久保明美ご夫妻

「天神さまに感謝の気持ちを込めて」

早咲きの梅も見ごろを迎えた二月十三日、フランス パリ在住のジャンポール エヴァンさん・忍久保明美さんご夫妻が献木（おもいのまま）され、御本殿で奉告祭を斎行、梅苑に植樹された。

ご夫妻は平成二十四年五月に当宮で挙式されたご縁があり、今回は五歳になる御子息の七五三詣にあわせ、神恩感謝を祈念して献木。「天神さまの御加護を受けて、背中を優しく押して頂いているような気がしています。これからも一歩一歩頑張って前に進んでいきます。」と語り、感激のうちに参拝をされた。

伊勢参宮

神社役員・崇敬者による恒例の伊勢参宮を一月十九日に行った。

本年は神社総代宮階有二氏を団長に総勢四十名の参加。午前七時に出発をした一行は先ず豊受大神宮を参拝、続いて皇大神宮を御垣内参拝し、今年一年の平穏無事を祈念した。

終日好天に恵まれ、おかげ横丁の観光や二見興玉神社への参拝など、充実した伊勢の旅となった。

ボーイスカウト第八十五団だより

○伊勢の神宮参拝

一月二十九日、ビーバー隊・カブ隊・ボーイ隊合同による恒例の神宮参拝を行った。まずは外宮を参拝し、続いて内宮を参拝した。神職による神宮の説明もあり、子供たちの真摯なお参りの姿が印象的であった。おかげ横丁では、大勢の参拝者の中、お土産探しや伊勢名物を見て回り、楽しい時間を過ごした。

菅公は「連歌の守護神」として崇敬され、北野天満宮では、鎌倉初期から御神前で「法楽」と称する連歌の会が開催されています。

室町時代には、北野連歌会所が設けられて、名立たる連歌の名人・宗祇が会所奉行を勤め、千句興行や万句興行も営まれ、天皇や将軍も一句を詠じられています。

連歌奉納

北野天満宮奉納梅ヶ枝連歌
平成二十九年三月十二日
於・北野天満宮

宗匠／丸山　景子
執筆／村尾　幸子

賦朝何連歌

宮司　橘重十九

初折・表

水温む御手洗の池薄紅梅　景子
庭すがすがしうぐひすの声　稔
うららなる春の光につどひ来て　まゆみ
雲の流れに友とつれだつ　節子
山峡の道をたどりつ語りつつ　孝子
空はあかねに暮れなづみ行く　まり絵
いざよひの月をさそふは琴の音か　純一
色なき風にしるき菊が香

初折・裏

秋しぐれ橋北詰に菓子どころ　絹代
桃割れ髪の笑ひ愛らし　幸子
あはき恋明るき声の思はるる　宣行
契りなさばや小冠者なれど　稔
わがさだめ薄きはつらし夏衣　景子
ひらり飛び交ふ鳥のかろやか　節子
忘れずに一本松を訪ね来る　まゆみ
波なさわぎそ旅僧なれば　まり絵
道けはし女人高野に露しげく　孝子
さやにすぎゆく中空の月　絹代
夜仕事に手機の音のひびく路地　幸子
童走りてあたたかき風　景子
咲き満ちる花ぞ宮居をことほぎぬ　純一
長き春日をそぞろめぐりて　まゆみ

宗匠／山村　規子
執筆／中村　和行

賦夕何連歌

宮司　橘重十九

初折・表

水温む御手洗の池薄紅梅　規子
歌詠み鳥ぞ集ふ広前　喜久男
嬉しやな弥生も晴れて浮かれきて　順子
霞たなびく峠の小路　満千子
風はやみ旅の衣で掬ふらむ　明子
ひとむらすすき見る人もなし　敦子
月照らす里はしづかに更けゆきぬ　武彦
あたため酒に文も軽やか

初折・裏

やさしげに笛の音も響くらむ　和行
励みと聞かば明日もさきはふ　喜久男
三十一の神のお告げはありがたく　規子
緑の杜にかむくらの舞　宣行
通ひ来よ鳥羽玉の夜は長からず　順子
いざこと問はむ遠き面影　満千子
領巾ふれどかへらぬこだま波の上　明子
涙とまらず石となるかや　敦子
置く霜に歳重ねたりいまいちど　武彦
月凍てつきし母思ふらむ　和行
尽きざるは今は昔の物語　喜久男
唐天竺の仏さまざま　規子
百千鳥交はす囀り花の山　宣行
苑のうたげにうましひちぎり　順子

神若会だより

○平成二十八年度 神若会総会

北野天満宮の神社青年会である神若会（柴田晃一郎会長）の総会が、三月十八日午後六時より社務所大広間で開催された。

本年は、天神様の御神徳の更なる発揚を目指す神社青年会として、平成十九年秋に当会が結成されてより十周年の佳節を迎えるにあたり、これまで当会活動に対し、ご尽力賜った関係各位への感謝と今後益々の盛会を祈念し、『神若会結成十周年記念事業』を執り行うことが全会一致で可決された。新たに結成された「北野祭保存会」も加わり、今後の活動にますます期待が寄せられる神若会。「北野天神太鼓会」と「北野祭保存会」が一丸となって結成十周年記念事業を盛大に実施することを誓い合った。

○北野祭保存会発足

北野祭（例祭）の調査・研究と、祭礼復興を目指すため発足した神若会『北野祭保存会』総会が二月四日夕刻、社務所で開催された。議事では、当会のメンバーで京都産業大学教授の下出祐太郎氏のゼミ生による、北野祭復興に向けての調査発表が行われた。下出教授は「今回の発表は学生の自発的な取り組みにより実現したもので、今後も多角的な側面から、祭礼の調査研究を行い、北野祭再興への足掛かりにしたい」と述べ、学生たちの熱い思いに期待を寄せた。

総会後は懇親会も開かれ、和やかな雰囲気の中、今後の活動に向け決意を新たにした。

「猿回し」が大人気
初天神と終い天神

昨年十二月の終い天神と、今年一月の初天神において、絵馬所前で日本伝統芸能の「猿回し」の奉納が行われ、参拝者の拍手喝采を浴びた。

奉納したのは、大阪にある猿のパフォーマンスを専門に行っている会社。申年だった昨年十二月二十五日の終い天神で奉納したところ大盛況だったので、今年の初天神で再度の登場となった。終い天神ではキング（オス、六歳）が、また初天神ではきなこ（メス、六歳）が、輪くぐりの跳躍や高い竹馬に乗って歩く演技などを披露し、周囲を取り巻いた満員の参拝者の笑いを誘い、盛んな拍手を浴びていた。

梅花祭献句

平成二十九年二月二十五日
宮司　橘　重十九選

「梅花祭野点大茶湯」でお点前された上七軒歌舞会の芸舞妓さんがこの日の感想を俳句にしたためて献句した。この野点は天正十五年、豊太閤が催した「北野大茶湯」の故事に因み、昭和二十七年斎行の千五十年大萬燈祭から続く茶文化ゆかりの北野ならではの行事である。

天　面映る梅とて色に散るこゝろ　尚そめ
地　いにしえと色香違わぬ梅の花　市多佳
人　白梅の一枝に湯立ち雪の釜　勝奈
佳　花愛でし北野詣での嬉しさよ　尚鈴
佳　見上げれば五つ団子と春の月　市知
佳　蒼穹に香り抜け立つ梅の花　勝也
佳　咲きにける願いを込めた好丈木　梅嘉
佳　鶯の唄にそよいで梅も笑み　里の助
雪どけに梅の訪れ感じつつ　市こま
梅ヶ香や袖かひてみる神子の舞　梅ぎく
雪かぶる梅の強さを我のぞむ　照代
白真弓春のけわいが人誘い　市多佳
初音鳴く花うつろいて春来たり　市多佳
梅も咲き梅のにおいにうっとりと　尚あい
咲き染めし梅の香かおる天神さん　尚絹
寒明けて梅もほころぶ便り来る　梅志づ
梅が香が漂う御土居鶯橋　梅はる
風雪にたえて春待つ寒紅梅　市桃
見わたせば梅の数々咲き誇る　梅ひな
梅の香に誘われ覗くおうす色　梅叶菜
梅の花百鳥の声春よ来い　市まり
精進を誓う社前に梅香る　勝也
軒の夜梅交じり春明かす月　尚そめ
幾年も散るにまかせし軒の梅　尚そめ
思うまゝ咲き香る花気高きや　梅葉
残寒の中にも紅白咲う日よ　梅嘉
幾年の思いたてたる梅花祭　梅ちえ
風花を梅と紛うや鳥一声　市純
真下より仰ぎて梅の三分咲き　勝音
東風にのせ香を走する梅の庭　梅智賀
梅花祭微笑みかわす去年の人　照代
豪雪にちらりのぞくや紅の色　照代
我待ちし春を報せる梅の花　市彩
春寒し手々もかじかむ野点かな　尚可寿

祭事暦（四月一日～六月三十日）

○四月
一日　午前十時　月首祭
三日　午前九時半　神武天皇陵遥拝式
九日　午前十時　賣茶本流献茶式
煎茶賣茶本流家元
渡邊琢祥宗匠奉仕
十三日　午後二時　末社 文子天満宮神幸祭
十五日　午前十時　月次祭
十六日　午前十時　摂社 地主社例祭
午後四時　末社 文子天満宮還幸祭
十九日　参籠
二十日　午前十時　明祭（中祭式）
二十五日　午前九時　月次祭
午後四時　夕神饌
二十九日　午前十時　昭和祭

○五月
一日　午前十時　月首祭
五日　午前十時　児童成育祈願祭
十五日　午前十時　月次祭
十七日　午前十一時　献酒祭
二十五日　午前九時　月次祭
午後四時　夕神饌
三十一日　参籠

○六月
一日　午前四時　摂社 火之御子社例祭
（雷除大祭）
午前九時　月首祭
参籠
八日　宮渡祭（中祭式）
九日　午前十時　青柏祭
十日　午前十時　二條流献茶式
十一日　午前十時　煎茶道二條流家元
二條雅荘宗匠奉仕
十五日　午前十時　月次祭
十七日　午前十時　末社 竈社例祭
二十四日　参籠
二十五日　午前九時　御誕辰祭（中祭式）
午後四時　夕神饌
三十日　午後四時　夏越大祓・茅の輪神事

天神さん 思い出写真館

先号に引き続き一千年大萬燈祭（明治三十五年春斎行）の写真である。先号は、仮遷宮を終えたばかりの仮殿前の風景写真だったが、今号は、正遷宮を終えた奉仕員の本殿前での記念写真である。写真説明には「明治三十五年三月九日早旦（早朝のこと）撮影」とある。仮遷宮から一年八カ月後である。

記録を見ると、正遷宮は三月八日午後十時から仮殿での御動座奉告祭で始まり、夜を徹して御神霊が遷座され、すべてを終えて本殿で御鎮座祭が斎行されたのは翌九日午前四時のこと。「鶏鳴暁ヲ報じ式全ク終了セリ」と結ばれている。

九日午前八時からは正遷宮奉祝祭が斎行されており、この記念写真は、奉祝祭が始まる前の撮影ということになる。

正式参拝された皆様（敬称略）（一月～三月）

一月	五日（木）	京都学園大学
一月	九日（月）	松江市遺族連合会
一月	十四日（土）	八坂自動車
一月	十九日（木）	関西医科大学
一月	二十二日（日）	京都市観光協会
一月	二十七日（金）	野上八幡宮
一月	二十九日（日）	三菱ＵＦＪニコス社長会
		京都市観光協会
		廣八幡神社
二月	五日（日）	関西医科大学耳鼻咽喉科学教室
二月	十日（金）	ＮＨＫ文化センター高松
二月	十九日（日）	上七軒天神講
二月	二十五日（土）	富山県神社庁教化委員会研修旅行
		空港東天満宮氏子参拝団
二月	二十七日（月）	菅原天満宮　総代会
三月	一日（水）	三越伊勢丹の旅
三月	五日（日）	池浦天満宮
三月	六日（月）	日光二荒山神社総代
三月	七日（火）	高座氏子総代会
三月	十二日（日）	京都連歌の会
		泉南中央ライオンズクラブ
		細田神社総代会

挙式された皆様（一月～三月）

一月	二十九日（日）	堀内　健造・郁恵	ご夫妻
二月	二日（木）	小久保　正也・尚江	ご夫妻
二月	十三日（月）	澤井　信博・香奈子	ご夫妻
二月	十八日（土）	吉田　潔充・智恵美	ご夫妻
二月	二十六日（日）	池田　大祐・典子	ご夫妻
二月	二十七日（月）	中瀬　正彦・千尋	ご夫妻
三月	四日（土）	坂井　岳生・未友妃	ご夫妻
		石井　宏志・かおる	ご夫妻
三月	五日（日）	山内　雄人・美鈴	ご夫妻
三月	十九日（日）	上野　晃平・麻見	ご夫妻

新郎新婦様、御両家の皆様の末永いご多幸をご祈念申し上げます。

月釜献茶（四月一日～七月三十一日）

○四月			
一日	献茶祭保存会	馬場　宗鶴	（明月舎）
九日	梅交会	西澤　宗房	（松向軒）
十五日	献茶祭保存会	木村　宗光	（明月舎）
	松向軒保存会	金澤　宗達	（松向軒）
二十三日	紫芳会	植中　宗佳	（松向軒）
○五月			
一日	献茶祭保存会	北野　宗道	（明月舎）
十四日	梅交会	郡　宗由	（松向軒）
十五日	献茶祭保存会	藪内燕庵社中	（明月舎）
	松向軒保存会	村上　宗恵	（松向軒）
二十八日	紫芳会	新居　万太	（松向軒）
○六月			
一日	献茶祭保存会	半床庵社中	（明月舎）
十一日	梅交会	吉岡　宗美	（松向軒）
十五日	献茶祭保存会	速水滌源居	（明月舎）
	松向軒保存会	仙水会	（松向軒）
二十五日	紫芳会	なでしこ会	（松向軒）
○七月			
一日	献茶祭保存会	長島　宗里	（明月舎）
九日	梅交会	合同茶会	（松向軒）
十五日	献茶祭保存会	堀内社中	（明月舎）
	松向軒保存会	休会	（松向軒）
二十三日	紫芳会	鬼塚　宗節	（松向軒）

献詠

濱崎加奈子選

菅公は詩歌に優れ、多くの名歌を詠われました。室町時代には「和歌の神」と仰がれ、さらに柿本人麻呂と山部赤人と並んで「和歌三神」と称えられています。

一月「野」

たのしみは野山眺めて空仰ぎ
　天地自然を感じる時　福井県　武曽　豊美

つくばひて芽吹き見つくる春日野に
　はるけき奈良のいにしへ思ほゆ　京都市　今井　輝子

紫野北野は晴れてよろこばし
　ビルヂング増える日本にありて　京都市　小山　博子

野に心放てば癒える傷あらん
　ビル聳え立つ街に問ひたし　京都市　若狭　静一

春立てる野には小鳥の声ひひき
　あゆむ足先若草の青　京都市　塩小路光胤

振り向けば何時の間にやら卒寿なり
　まだ健康で野良に出る幸　岐阜県　波多野千寿子

【評】
茂みに白百合の咲く夏の野、草むらに露おく秋の野、そして冬の枯れ野。四季折々に「野」の風情が詠まれてきた。新年の野といえば、若菜だろう。「君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ」光孝天皇

二月「紅梅」

寒風に咲くや白梅楚々として
　やがてぬくもり紅梅の咲く　福井県　武曽　豊美

「紅梅ってぽっと咲くね」と友は言ふ
　寮生活もはや三年目　大阪府　村島　麗門

旅帰り八重の紅梅買ひ求め
　今年で十年見事咲き満つ　岐阜県　波多野千寿子

紅梅は初天神で香はしく
　笑ふ赤子も無垢で陽るく　京都市　小山　博子

庭梅の紅のぞかせるふくらみは
　ゆるむきざしか日毎ながめて　京都市　今井　輝子

平成の議論続けどあるがまま
　咲くや名残りの紅梅白梅　京都市　若狭　静一

淡雪の降りにし朝に紅梅の
　匂ひたちけり春を呼はむと　京都市　塩小路光胤

【評】
白梅のあとに紅梅が咲くことを詠む歌が見られた。八世紀に中国から渡来した白梅に対し、九世紀半ばに日本にはいってきた紅梅は、時代的にもあとからきた新しい感覚の梅であった。

三月「地」

天満の紅白梅の香は昇り
　神へ通じる地に泉湧く　京都市　小山　博子

世の中にいのちたまはり生かされて
　ものみな還る母なる大地　福井県　武曽　豊美

リオ五輪相手の国は何処にある
　地球儀廻し確かめてみる　岐阜県　波多野千寿子

地をばけり勢ひつけつみつけたる
　いまのならひのむなしさおほし　京都市　今井　輝子

平成の時代に生きる若者よ
　パール・バックの「大地」読みしか　大阪府　村島　麗門

【評】
水ぬるむ春、地中の虫も目覚めて姿を見せる。冬から春へと、季節の変化は大地の表情にあらわれる。

●献詠奉納についての問い合わせは、北野天満宮献詠係までご連絡ください。

【辞令】

橘　重十九　北野天満宮 宮司
神職身分 特級に昇進（平成二十九年二月三日付）

【責任役員】

◎現職

渡辺　孝史　殿（平成十四年九月一日 就任）
塩尻　良市　殿（平成十五年 六月二十六日 就任）
渡邉　隆夫　殿（平成二十三年三月二十九日 就任）
宮階　有二　殿（平成二十七年三月二十六日 就任）
井狩　誠　殿（平成二十八年三月三十日 就任）
小石原　満　殿（平成二十八年三月三十日 就任）

【神社総代】

◎現職

長嶋　秀樹　殿（平成十四年一月二十二日 就任）
多門　弘　殿（平成十五年六月二十六日 就任）
畑　正高　殿（平成十五年六月二十六日 就任）
鈴鹿　且久　殿（平成十五年六月二十六日 就任）
國枝克一郎　殿（平成二十一年四月一日 就任）
大串　靖　殿（平成二十七年三月二十六日 就任）
芦田　友秀　殿（平成二十八年六月二十八日 就任）

◎新任

田中　俊夫　殿　社会福祉法人 岩倉ノ郷 洛翠圓 理事長（平成二十九年一月二十六日 就任）
舞鶴　一雄　殿　株式会社 西陣まいづる 代表取締役（平成二十九年一月二十六日 就任）
柴田晃一郎　殿　北野天満宮 神若会 会長（平成二十九年一月二十六日 就任）

【職員人事】

◎採用（四月一日付）

出仕　威徳寺秀洸（國學院大學神道学専攻科卒）
出仕　米川　安世（國學院大學神道文化学部神道文化学科卒）
巫女　大坂屋摩也（京都文教短期大学食物栄養学科卒）

◎依願退職（三月三十一日付）

事務員　益田　真実
事務員　上田　彩華

天満宮 歴史の一齣

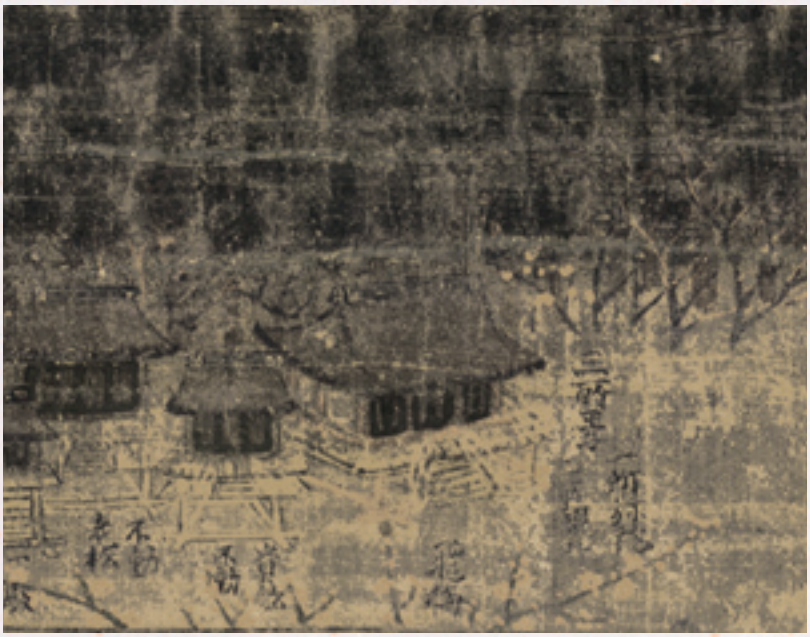
「社頭古絵図」（四）
―「三所皇子」―

京都大学名誉教授
藤井 譲治

社報の一一号で触れた室町時代の北野社の参詣作法に従って、境内の主な社についてみていこうと思います。現在、本殿の後ろの最も東側には地主神社があり、天満宮創建以前よりこの地に鎮座していた神社とされ、それとともに道真公のご血縁など、特にとゆかりの深い方々三人の皇子が祭られています。一方、「社頭古絵図」には、地主神社の所に社が描かれていますが、そこには「一所阿弥陀、二所観音、三所王子」と記されています。これを少し考えてみようと思います。

『北野天満宮史料 古記録』に収録されている応永一四年（一四〇七）の「神記」（「神変霊応記」）には、東門から境内に入り、三所皇子、貴船、老松、後戸舎利、十二所へと進む参拝の順序が記されており、現在の地主神社また「社頭古絵図」の「一所阿弥陀、二所観音、三所王子」がこの「三所皇子」にあたることがわかります。なお、「三所皇子」は「三所王子」と記されることがあります。また現在の社殿は、慶長十二年（一六〇七）に豊臣秀頼によって、本殿とともに修造されたものです。

この「神記」には、それぞれの祭神についての由緒が記されています。「三所皇子」については、東間に「敦実親王」、中間に「英明」、西間に「斉世親王」が坐すとしています。東間の「敦実親王」は、宇多天皇の子、醍醐天皇の弟であり、本地は「聖観音」と記されています。本地とは前近代に広くおこなわれていた本地垂迹思想にもとずく本地仏のことで、この「社頭古絵図」に描かれた末社の祭神の大半には、本地仏についての注記がみられます。



「社頭古絵図」の三所皇子

中間の「英明」は、宇多天皇の孫 斉世親王の子で、三位中将となった人で、その母は道真公の娘であり、本地は「阿弥陀」と記されています。

西間の「斉世親王」は、宇多天皇の第三皇子で、道真公の聟であり、「英明」の父で、三品兵部卿に任じられ、本地は「聖観音」と記されています。

そしてその跡に「三所皇子一殿御坐」とあり、応永の時代から三祭神が相殿で祭られていたことがわかります。

この「神記」の記事と「社頭古絵図」の記載とをみると、「社頭古絵図」の「一所阿弥陀」は、本地仏の記載「阿弥陀」から「神記」の祭神「英明」であることがわかりますが、「社頭古絵図」の「二所観音、三所王子」が「神記」の「敦実親王」「斉世親王」のどちらに対応するかは、本地仏がともに「聖観音」であることから決めがたいのですが、「神記」の記載順序や後の記録等からして「二所観音」が「敦実親王」、「三所王子」が「斉世親王」であると推定しておこうと思います。

なお地主社、地主神社という呼称は、中世にはみられないようですが、一七世紀中頃に成立した黒川道祐の『雍州府志』に最初に詣る神として「地主之神」がみえるのが、早い例です。

天満宮
［第十四号］平成二十九年四月十五日 編集・発行／北野天満宮 編集責任者／神原 孝至 〒六〇二―八三八六 京都市上京区馬喰町 電話 〇七五―四六一―〇〇〇五（代表） http://kitanotenmangu.or.jp/

火之御子社例祭 六月一日

雷除大祭

かみなりよけたいさい

●「北野の雷公（きたのらいこう）」と称えられる火雷神

農業・林業関係者に広く信仰され、近年では電気関係（電力会社等）、ゴルファーや釣り人の間でも信仰が広がっています。

●特別授与品の頒布

雷除けのお守・お札を開門の午前五時より特別に授与致します。

このお札は、「北野千体札」と称され、古くは千体限定の授与でしたが、近年はこの日より三日間頒布します。

●演芸披露

絵馬所では、午前十時より午後三時まで京都産業大学落語研究会による落語・漫才等の演芸が催されます。

なごしのおおはらえしき

夏越の大祓式

どなたでも神事に参加できます。

六月三十日 午後四時

●茅の輪をくぐって、無病息災を祈願！

午後四時から神事を執り行い、神職とともに茅の輪くぐりを行います。

茅の輪をくぐって、厄難を祓い落しましょう！

●人形・車形でお祓いしましょう

人形に氏名・年齢を記して三度息を吹きかけます。

それを身の代わりとして大祓に差し出してお祓いします。

また交通安全祈願として、車形もあわせて行いましょう。

※氏子区域の皆様には、氏子総代を通じて形代をお配りします。

車形代

人形代

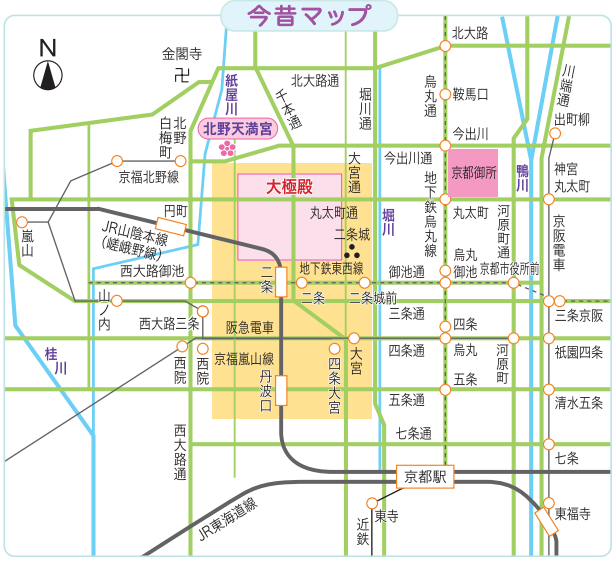
御縁日 境内ライトアップ

毎月25日は天神さんの御縁日。
夜9時まで境内特別ライトアップ！

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）
  季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。

今昔マップ



平安京

当宮は平安京の乾に位置し、古くより天のエネルギー、パワーの働く北野の地に祀られています。

平安京の内裏、大極殿北西に位置し三光門の真上に北極星が輝き、天子様が北極星を拝する聖なる社でした。

平安京の大極殿（遷都より600年の間）は今の京都御所の西にありました。

紙屋川、堀川に挟まれ、すぐ北西に当宮が建てられています。

平安京（大内裏）
大極殿（室町時代迄の平安京）
京都御所（室町時代以降）